

「う、ん……ふい」はどい」だ？」

冒険者の男が飛ばされたのは、見たこともない場所だった。うっそうと生い茂る木々に、よどんだ空。深い森のような所。

（あー。しまった、やっちゃまったか）

男はすぐに自分が罫に掛かってしまったのだと理解した。つい先までいたのは、もっと薄暗いダンジョンの中。どうやら転移罫に引っかけってしまった様だった。

（まあいい、ちようどいいしこの辺りも探索しておくか……）

男は冒険者家業、中でも遺跡や迷宮などのトレジャーハントを生業としていた。

そのためこのような見たこともない場所は、荒らされず宝がある確率が高く都合が良かった。

今いるのはその男にとって初めての場所。
こんな見ず知らずの所にひとりきりだ。
普通もつと慌てても良さそうなものだが、
男はそんな様子も見せず落ち着いていた。

それはひとつのアイテムのおかげだった。

（「いつがあれば、なんともなるしな……」）



『転移石』と呼ばれる魔法石。
それを用いれば一度訪れたことのある場所に、
どこへでも転移できるのだ。

ダンジョンに潜る冒険者にとってはうってつけで、
生命線とも言えるアイテムだった。

(ひと……か……?)

探索を続けていくと、目の前に人影のようなものが見えた。
シルエット的には女性のようだ。
様子を伺うため男は物陰に身を潜めた。



人影はふらふらと男の方に近づきながら歩いており、
目を凝らすとだんだんと姿が見えてきた。

（あれは、魔物か）

人影の頭には羊の角のようなもの、そして尻尾があった。

（もしかして、レッサーサキュバス……か？）



男は仕事の性質上魔物の生態にも詳しくかった。

レッサーサキュバス。

それはサキュバスと呼ばれる種の、下位種。

サキュバスは淫魔とも呼ばれ、人間の精を奪う危険な種である。しかし下位種であるレッサー達は、サキュバスよりも

魔力も腕力も低くそれほどの危険は無いのだ。

(これは、ラツキーだな)

そんなレッサーサキュバスに遭遇し、
男が喜んだ理由は単純だった。

売れるのだ。

サキュバス達は、己の身体を用いて雄から精を……
具体的に言えば精液を奪う。



そのため彼女達の肉体は、それを行う事に特化している。
もし捕獲できれば、専用の奴隷売買所に高く売れる。
サキュバス種であれば危険度も高いが、
レッサーサキュバスならそうだったことも少ない。

まさに性奴隷にするにはうってつけの存在なのだ。
その上個体数が少なく、遭遇できることも珍しいため
男はラツキーだと思っていた。

「動くな！」

男は短剣を携え、彼女の前に飛び出した。彼の目に飛び込んできたのは、レッサーサキュバスのあられもない姿だった。

陰部こそ隠れているものの、上半身はさらけ出され大きな胸が丸見えだった。

（これは……）



おもわずたじろいでしまう。

というのも、生のレッサーサキュバスを見るのが初めてだった。男の精を奪うことに特化した豊満な体つき、

人間とは異なる黒い角膜、そしてそれと対象的に桃色で綺麗な乳首がたまらなく魅力的に見えたのだ。

（その筋の奴隷商に高く売れるのも納得だ……）

「……………♡」

男の存在に気がついたレッサーサキユバスは、
喜ばしい表情を浮かべながらゆっくりと歩み寄る。
そのたびに、胸が重力によつて揺り動く。
男は思わず生唾を飲み込む。



（これは売ってしまおう前に、
一度楽しんでおかないと後悔しそうだな……………）

男は短剣を投げ捨てると、レッサーサキユバスの腕を掴んだ。
柔らかい身体の感触に、一気に理性が飛びそうになる。
そのまま押倒してしまいたかったが、
予想に反してレッサーサキユバスは抵抗を見せた。

どうやら彼女の方が男を押し倒したかったのだ。

レツサーサキユバスの腕力は人間のそれとほぼ同じ。その気になれば男は押し返すことも出来た。しかしそれならばとそのまま身を任せた。

柔らかな草の上に押倒されレツサーサキユバスが男にのしかかる。

ずっしりとした女体の感触が、下半身に伝わる。

（これはたまらんな……）

こここのところ男は自慰行為も、娼婦を買う事もしていなかった。レツサーサキユバスの尻肉の感触に、すぐさまペニスが勃起する。もどかしさと欲に任せて、衣服を脱いでいく。

ぬりゆり——♡

露出した生のペニスの上にレツサーサキユバスの秘部が纏わり付いた。

既に洪水の様な愛液で満ちていたのだ。ぬるぬるとした性欲を刺激する感触にまんざらでもない男は息を荒げる。

それはレツサーサキユバスにしてみても同じことで、精液を吐き出すペニスが自分の股下にあることに我慢できない様子だった。

レツサーサキユバスは。ペニスを掴みあげるとすぐに挿入した。

「……………♡♡♡」

「うあつ！ これはっ！」

サキユバスの膣に。ペニスを挿入してしまった男は、
魔性の感触に目を白黒させていた。

ほどよい体温で暖められた膣肉がねっとり絡みついていく。
精を貪る者に恥じない底なし沼に、
男はとうとう片足を入れてしまったのだ。

（こんなのにすぐに射精してしまうっ！）



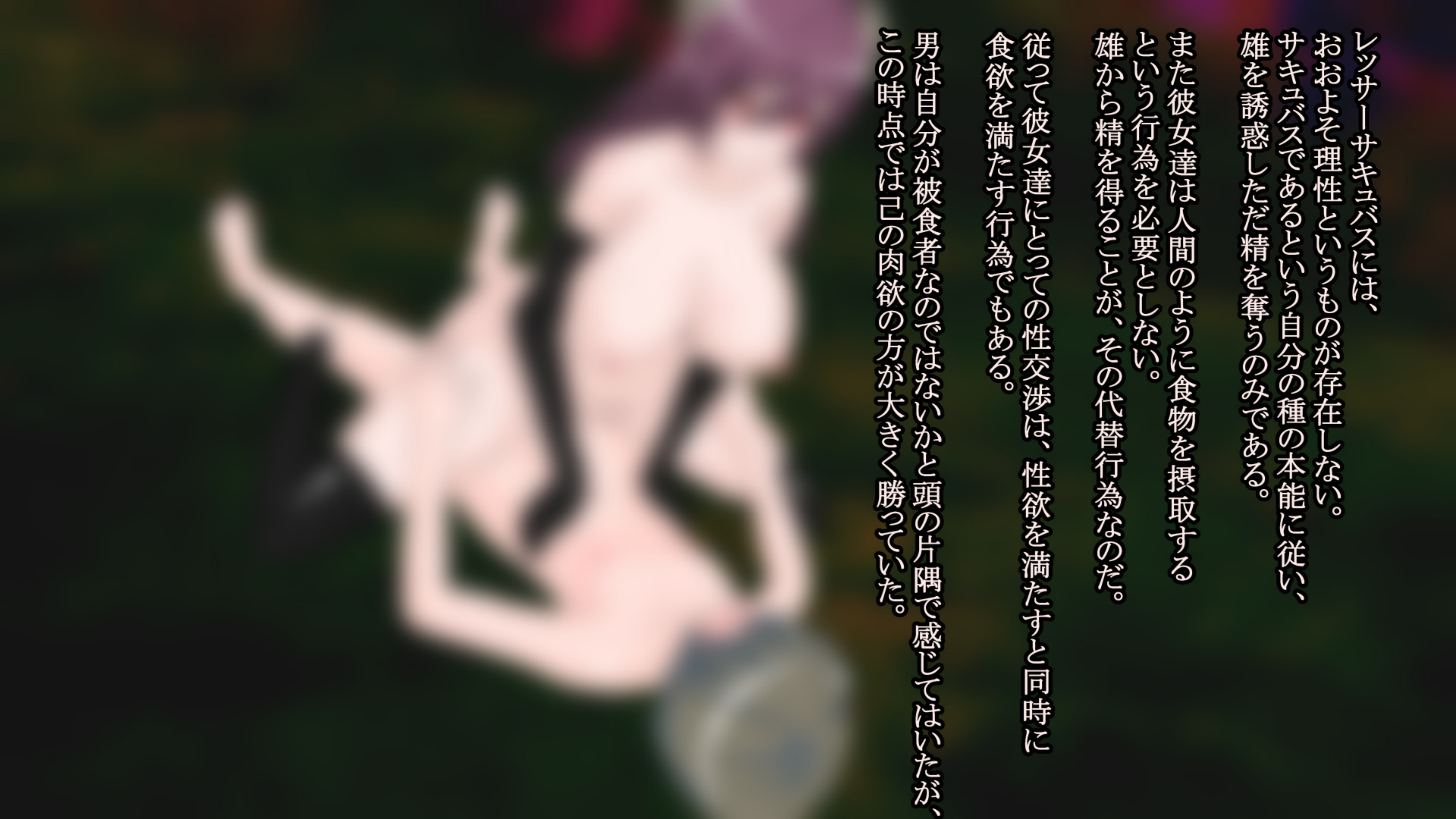
男は性行為が初めてというわけでもなかった。
いままでに娼婦を抱いたことも、
恋人と行為をしたことも何度もあった。
だが今この目の前にいる魔物は、その誰よりも良く
経験のしたことのない快感を与えてくれていた。

（こんなにすごいのか、サキユバスの身体は……！！
売ってしまうのが惜しい。
ずっと自分のものにしたいくらいだ！）

男はまだ捕獲もしていないレッサーサキユバスを、
まるで所有物であるように考え、
そしてラッキーだと思っていた。

このときまでは――。





レスサーサキュバスには、
おおよそ理性というものが存在しない。
サキュバスであるという自分の種の本能に従い、
雄を誘惑したただ精を奪うのみである。

また彼女達は人間のように食物を摂取する
という行為を必要としない。

雄から精を得ることが、その代替行為なのだ。

従って彼女達にとっての性交渉は、性欲を満たすと同時に
食欲を満たす行為でもある。

男は自分が被食者なのではないかと頭の片隅で感じてはいたが、
この時点では己の肉欲の方が大きく勝っていた。

「はあ……はあ……」

長い射精により男は息を荒げていた。

「……………♡♡」

一方のレツサーサキユバスは膈内に精液を出され、うれしそうに笑みを浮かべていた。

(すごいな……………)



人間相手ではこうはいかない。

膈内射精はすなわち妊娠行為になる訳であり、娼婦には嫌がられ、恋人同士であっても様々な問題が生じる。

ところがどうだろう。

目の前のこの美しい魔物は、中出しを嬉々として受け入れただ楽しそうにしていた。

そんな中、男達に近寄る影があつた。

レッサーサキユバスである。

茂みからするガサガサとした音に目を向けると、そこには2匹目のレッサーサキユバスがいたのだ。

(まじかよ……)

人間の雄の匂い、性行為の気配につられてどこからともなくやってきたのだ。

彼女は既に発情しており、顔を赤らめ陰部に手を這わせていた。



その光景に目を奪われていると、
のしかかっている方のレッサーサキユバスが
そのまま腰を動かし始めた。

ずちゅっ、ずちゅっ。

「……………うおっ！ まだいったばかりなのに」

まるでこつちを見て、とでも言わんばかりの行動だった。



ぬちゅぬちゅ、ちろちろ……。

ペニスと乳首に別々の刺激が与えられ、
そのどちらもが極上の感触。
男の感度が急速に高められる。

「あぐっ、すげー……。」

乳首の愛撫により得られた快感はそのまま。ペニスへと直結し、
レツサーサクユバスの膣内でビクビクと震える。



短い時間による2回の連続射精。
いくら性欲が溜まっていたとはいえ、
一般人であった男は疲れきってしまった。
もう十分である。

だが――



急に男の視界は、キスよつて塞がれた。
3匹目のレツサーサキユバスだった。

（うぐ、何だ!?!）

何でこんなにレツサーサキユバスがいるんだ!?!）

男は混乱する。

希少種であるレツサーサキユバスが、一同にこんなに
現れることはない。

絶対数が少ないが為、奴隷商の間でも高値で取引されるのだ。



しかし、

それは人間界ならばの話である。

男は今居るこの場所を、人間界だと思っていた。
ダンジョンと一口にいつても、
こういった森の様な不思議な場所も確かにある。
それ故ダンジョンの中で転移したと思っていた。

でも実際は違うのだ。

ここは人間界とは異なる場所、

『淫魔界』

だった。

